

## 第5回がん看護専門看護師海外研修報告

青柳秀昭（北里大学病院）

岩田友子（桑名西医療センター）

シュワルツ史子（神奈川県立がんセンター）

団長 菊内由貴（熊本大学大学院）

### 【はじめに】

今回、公益財団法人小林がん学術振興会による助成を受け、2015年9月5日～9月11日までの7日間にわたり、第5回がん看護専門看護師海外研修として米国での研修に4名が参加した。本稿では、研修で学んだ米国の現状から、「米国における看護体制の特徴」および「臨床実践の質向上のための高度実践看護師の役割」について報告し、総括として「日本におけるがん看護専門看護師の役割」について考察する。

### 【研修の概要】

研修は、米国での看護教育等に関するレクチャー、病院見学、高度実践看護師のシャドーイングという3つで構成された。この3点における特徴的な事柄について以下に述べる。

#### 1. 米国の看護教育等に関するレクチャー

レクチャーでは、米国における看護教育、保険医療制度、医療政策等について情報共有とディスカッションを行った。特に興味深かったこととして、看護の大学院教育発展の中で博士課程において、より高度な実践的能力育成する『看護実践博士/Doctor of Nursing Practice（以下、DNPとする）』があった。日本の大学院における博士号は主にPhDであり、実践者ではなく研究者としての役割である。米国におけるDNPは、研究論文よりはむしろ現実社会を題材として変化をもたらすためのプロジェクトマネジメントの能力を育成するという特徴がある。このような実践的なプログラムは、修士号を有する高度実践看護師が、さらなる研鑽を希望する際に非常に有用であると考えられる。



図1 高度実践看護師とのディスカッション

#### 2. 病院見学

病院見学は、UCSFメディカルセンターおよびスタンフォード大学メディカルセンターの2か所で行った。

##### 1) UCSFメディカルセンター見学

UCSFメディカルセンターでは、がん専門栄養士による栄養相談やがんやエイズなど生命の

危機に直面する病を持つ患者・家族等がアートにより気持ちや体験を表出するために心理士が行う Art for Recovery 等を見学した。また、日本のがん相談支援センターにあたる、がんに関する非医療のサービスを提供(情報提供、ピアサポートグループ、図書館等)を行う Cancer Resource Center においては、主には非医療スタッフで構成されていた。中でも Patient Support Crops という患者の意思決定をサポートするためのプログラムの提供には、医学や看護等の医療系の大学進学を希望している学生がトレーニングを受けインターンとして活躍していた。学生の段階で、患者の生活を中心とした多職種での支援を学ぶことは、その後の専門職としてのチーム医療への貢献につながると考える。

また、米国における患者サービスの特徴として、システムティックである点が挙げられる。具体的には、在宅療養に関するサービスとして、患者は患者専用のページ『My Chart』を所有し、検査データや画像など自宅から見ることができ、診察後に医師・看護師へ直接メールで質問でき、担当者は24時間以内に返信する仕組みとなっていた。さらに、放射線治療中で毎日通院しなければならない遠方に住んでいる患者に対しては、患者の予算に合わせて選べるレジデンスやホテルの紹介と紹介先から病院への送迎サービスの提供などを患者支援センターと調整して行い、タイムラグなく患者は治療に臨める仕組みになっていた。また、患者が望む治療の選択肢の確保として、統合医療を提供する施設が存在し、それに関する知識が豊富なことや保険医療のシステムの中でどう組み込むかについてよく考えられていることが分かった。この件については、アメリカ独自の複雑な保険システムが背景にあることでの結果ではあるが、『がんになった自分が治療を続けるために気分が良くなること』に患者が敏感であること、何をどのように選ぶかについて権利の保証がされていることも大きいと考える。



図2 UCSF メディカルセンターにて

## 2) スタンフォード大学メディカルセンター見学

スタンフォード大学メディカルセンターでは、1日200名ほどの患者を診察する救急外来を見学した。そこには、化学汚染に対応できる設備や救急外来入り口に金属探知機を設置する等、安全対策が施されていた。



図3 スタンフォードメディカルセンター

### 3. 高度実践看護師活動に対するシャドーイング

高度実践看護師の看護実践に対するシャドーイングとして、UCSF メディカルセンターにおいて、研修生の各自の研修目的に基づき部署が調整され、血液内科病棟、症状マネジメントサービス、泌尿器科、放射線科/通院治療室等で行った。

#### 【米国における看護体制の特徴】

病院見学やシャドーイング等を通じてとらえた米国における看護体制の特徴について、「臨床教育体制」「看護師の職務能力の可視化とキャリア開発」という2つの視点から述べる。

#### 1. 臨床教育体制

臨床実践家に対するがん看護教育において、教育資源提供体制および教育支援体制の2点について大きな示唆を得ることができた。

まず1点目は、教育資源提供体制についてである。米国におけるがん看護教育においては、米国がん看護学会（Oncology Nursing Society：「以下ONSとする」）がその中核を担い、最新の研究知見に基づき臨床に必要な情報提供およびスキル獲得のための学習環境が集約・整備されていた。その例として、ONSが、がん看護領域の看護能力を修得するための学習教材および能力確認テストをオンライン上で会員向けに提供している。このことにより、最新知識・スキルの中央化および共通化が達成されていると考えられた。そして、各病院組織における看護師教育のためのコンピテンシーや教材を独自に作成するのではなく、ONSによって提供される教材を活用されることによって、知識や教材の質の担保につながっていると考えられた。例えば、外来化学療法室に就職を希望する場合には、ONSの化学療法・バイオセラピーコースのテストに合格し修了認定証を得ることが雇用条件となっており、単に学習教材を見ただけではなく、必要な知識の獲得を証明するものとなっている。さらに2年ごとに認定証の更新が求められることにより、知識のリニューアルも実現していた。また、病院という一組織内での知識情報に留まることなく、常に学会が更新する知識情報を確認しながらスタッフの知識

レベルを維持するという点においても、知識教育の中央化は有用であると考えられる。ONSが主導し臨床看護師の基礎的知識の拡充を図っていたのは大変印象的であった。

院内教育体制においても各コンピテンシーの明示および達成のための学習資源は中央化され職員向けホームページ上で提供されていた。一定レベルの教育をe-ラーニングで展開し、看護師の専門的知識の習得の支援を集合化することで、看護師の質の担保に貢献し、また雇用先である病院側もその認定を採用の条件にするなど、学会と雇用側の連携も非常に明確で可視化されていた。今後、e-ラーニングの活用した学習教材の中央化による質の保証と知識の拡充は日本でも発展していく可能性を持っていると考えられる。

2点目は、教育支援体制についてである。教育支援体制は主にOJTとOFF-JTの2つがあり、OJTは主に専門看護師、OFF-JTは看護教育に特化した修士課程を修了した看護教育担当（Clinical Nurse Educator:「以下、CNEとする」）が複数名で構成される中央部門が担い、組織全体としての教育企画運営を担っていた。また、CNSとCNEの2つの役割の連携強化をめざし、CNSの所属を中央教育部門とするとした組織再編制が最近導入されたところであった。このような役割分担により、CNSは臨床現場に常駐し、スタッフの身近な相談役として積極的に話を聴き、実践を見せながらEBNに基づくOJTを行っていた。また、CNSは臨床の質の向上に焦点を当て、CNEは全体の看護師の質向上に焦点を当て、それぞれの役割を持ちながら互いに連携していた。日本においては、臨床看護教育に特化した学位を修得する大学院がなく、病院で教育専従する看護師は数名か不在の場合であるため、CNSは院内外のOFF-JTにおける役割比重が高くなる傾向がある。そのような現状を踏まえつつ、臨床実践を通じた質の向上に貢献するという専門看護師の本質的な役割を発揮するために、臨床実践における専門看護師の活用の在り方を検討することが大切であると考えられる。

## 2. 看護師の職務能力の可視化とキャリア開発

米国においては、看護師の職務能力をはじめとした役割や能力の可視化が明確であった。看護師の職務能力について、看護師自身が自分のキャリア目標を明確に持ち、その目標が実現できる場所を選択できるためには、病院側が看護師に求める職務能力を可視化して提示する必要がある。その点において、米国では病院側として求める職務能力を主に、職務記述書、看護師標準コンピテンシー、病棟コンピテンシー（例：骨髄移植等、病棟に特有な看護実践のためのコンピテンシー）、クリニカルラダー（I～V）等、主に4つの観点から評価していた。その中で、専門看護師は、クリニカルラダーVという区分である。日本においては、クリニカルラダー制の中でも、経験年数に応じて、ある程度自動的に進める慣習があるのに比べて、米国では個人の価値観や生き方が尊重されるために、ラダーを上に進めるかどうかは、個人の選択であり、自分の意思決定によりラダー進級の試験を受け、合格すればラダーの役割に応じた報酬がある。現代の日本においても、今後ますます子育てや進学等を含めた価値観や生き方の多様性が進む中、自分で選択し決定できることや、努力と報酬の適正化は、モチベーションの向上とキャリア開発のために非常に重要であると考えられる。

### 【臨床実践の質向上のための高度実践看護師の役割】

米国における高度実践看護師が担う臨床実践の質向上のための取り組みとして、以下の3点が挙げられる。1点目は、EBNを実践していくためのガイドラインの整備や成果の可視化である。米

国において専門看護師は、臨床現場での看護実践の質向上のため、主にスタッフ教育や看護の質の可視化を行っていた。また、ナースプラクティショナーは、高度なフィジカルアセスメントやEBNに基づく質の高い実践を行い、その成果の可視化を行っていた。以上のことから、臨床実践の質向上を達成するための高度実践看護師の役割として、最新かつ適正な研究成果やガイドライン等をわかりやすくスタッフに伝達することや、看護教育運営の場面でエビデンスの重要性を伝えていくことが大切であると考えられる。

2点目は、カンファレンス等での調整役割を含めた多職種チーム内でのリーダーシップである。米国では、多職種チーム内において各専門職が自身の役割を明確にできるよう意見を積極的に述べている中で、高度実践看護師は、チームメンバーの話にじっくりと耳を傾け、多数の意見を調整する役割をとっていた。多職種や多くの人々が患者や家族のケアにかかわるがん医療の中で、各専門職間の連携をより円滑化し、各職種の専門性をより発揮するために、チームメンバーの役割や力量を知り、認め尊重するという高度実践看護師のもつ役割は非常に重要であると考えられる。さらには、チームメンバーの力を引きだし、患者にとって最善のアウトカムにチームの力を導くリーダーシップの役割が重要であると考えられる。

3点目は、スタッフナースの成長を促すための人間関係調整能力やモチベーションを向上に働きかけることである。米国では、医療者間の連携において、スタッフ同士が常に感謝の気持ちを伝え合うなど、相手を認め、職種間の風通しを良くすることで、必要な情報を看護師に集めるように努力していた。特に病棟運営において、専門看護師は1～2ユニット単位で配属されており、病棟における感染対策のための手技や日々のベッドサイドケアを中心としてスタッフに専門的知識を通じて身近な相談役としてスタッフに声をかけ支援を行っていた。このような日々の臨床実践の支援という立場は、日本の看護師長や副看護師長にあたるマネジャー、サブマネジャーの役割とは明確に区別され、この3者間で打合せを密に行い協力し合うことにより、様々な角度からスタッフの関係調整やモチベーション向上貢献していた。また、スタッフ教育については、専門看護師は集合教育の企画運営にも関与しつつ、主として臨床実践における相談役という特徴を持っていた。我が国においては、専門看護師の数が少なく、病棟に密着することが難しかったり、管理者としての役割を併任したりということが多いという現状の中で、専門看護師としての臨床実践支援役割の折り合いのつけ方は模索するところである。



図4 CNS：左端、ナースマネジャー：右端、サブナースマネジャー：中央との打合わせ

## 【日本における看護専門看護師の役割】

米国における看護を含めた医療全体の特徴は、役割や成果の明確化、教育のシステム化といった徹底した合理性であった。しかし、米国における役割の明確性や合理性は、人種のるつぼといわれる米国文化を背景として機能しているのであり、そのまま日本の文化に適合するものではないと考えられる。専門的な役割を明確にしつつも、相互に補完しながら、役割によりケアが分断されることなく切れ目のないきめ細やかなケアを実践していくことが、全体の和を重んじる日本文化における専門性の尊重につながるのではないかと考える。このことから、日本における専門看護師は、役割を可視化しながら、多職種や様々な人々の間に生じる隙間を補完しながらチーム全体としての力を高めるような役割が重要であると考えられる。

## 【おわりに】

今回の米国研修では、専門看護師を取り巻く様々な環境の違いに圧倒されることも多かった。その一方で、日本ならではの専門看護師としてのあり方を見つめなおすことにつながった体験であった。この研修を通じて、米国のよい点については日本文化に融合させつつ取り入れ、また日本独自の専門看護師のあり方については、誇りと自信をもって発展させていくことが大切であると感じている。

今回の研修では、研修生の学びを効果的、効率的に最大限引き出すよう配慮されていた。また異なる背景や立場を持つ4名の研修生が、互いの経験や学びを共有しディスカッションする中で、すばらしいグループダイナミクスが生まれ、互いの学びの深まりを実感した。また、現地の日本人コーディネーターである石井氏は、米国大学院を経て専門看護師を取得し現地での実践経験を有していることから、研修生と米国関係者の間のディスカッションを専門看護師の視点を含めながら、より深みをもたらすようファシリテートしてくださった。このようなすばらしい研修環境に心より感謝する。

最後に、このような大変貴重な機会を与えていただいた小林がん学術振興会、日本がん看護学会に心より感謝申し上げます。また、研修前から研修中、研修後を通じて細やかな支援をいただきました現地コーディネーター石井素子氏、金森祐子氏、米国スタッフの方々、すべての皆様に心より感謝申し上げます。

以上